新體詩叢書第二編

須ゝ奈美

嘉興社
發行

序

わらうどたちれ言は
きずそそまじらぬも
詞もいきほひするどく
してわかき人あり
めづらしげにおい人
はちまきまつはるところ
あり味つけありて老れ
たるどちにもげすと
こうづれけるつゞきどから

うげにそのものけうな
くやおもいま参
さればこそ老ゆくすゑの
わがき後ハ何なぞり
まうきでのおかゆする
銭そし　らむそと
もうしよのうねまざ
みそこの一文銭ハ
そのまゝうどたち
可し見せんとてあ

はえらおくるれ兒
里におゆびとれまう
ひそかいふもまう
扨まし何らず扨れ
書ゝるふそあらぬ
茅田岳坂医东
京二何の係こうるれき
ざうのおやあてりして
明治三十年九月十
六日しるす

序．

これの詩集もわが机の島のながめにせむとて日でろしたしう交れる人々の作るあながちに乞ひ求めてあつめたるなりけりさるを作者のこゝろも問もずひとのそゝのかすまに〳〵世に出すことゝもなりぬみなこの道にこゝろざし深き詩人の作にしあ

れはいづれもあはれにを
かしう眺めらるゝを色も
なく香もなき「幽花一枝」附
録としてそへたるは松が
根にはふ蔦かづらのつた
なきわざよと人の見たま
はむこと羽束師のもりの
村しぐれに厚かましき面
も紅葉してなむ

明治三十年

むくらのや主人

知頁

目次

雛のや集（一頁）河井袖月
わか草（二十三頁）奥原幽芳
淺茅の露（三十九頁）野用土龍
うき草集（六十一頁）王造小萩
初もみぢ（八十三頁）堤紅蔭
みなわ（九十五頁）花井燕女

附錄

幽花一枝　金子知頁

雛のや集

袂百合　河井袖月

夕こえくれば片やまの、
　かげもをぐらき夏木立、
葉するゑのしづく柞の露、
こゝに集めてさら〳〵と、
清水ながるゝ山かげを、
　わへぎ登るは誰ならむ。
山路に熟れて足はやく、
　さきにすゝめる若人は、
あとふり返り我妹子よ、
　汝が戀ひ慕ふ伯母上の、

み墓のほとり近づきぬ、
暮ぬほどにと急がなむ。
ちがや熊笹ふみわけて、
みづえを交す榴の葉の、
木蔭にたてる石ぶみに、
結びあふるゝ眞清水を、
注ぎ盡せどおのづから、
落るなみだや阿伽の水。
はゝとゐやまふ若人も、
伯母と慕へる少女子も、
まさきくましゝ夢の跡、

忍ぶにあまる露しぐれ、
四つの袂にうるほひて、
あたりの草も萎れつゝ。
もろ手あはする苔の上、
二人並びてぬかづけば、
世にふさはしき妹と背の、
末の契りなたがへそと、
聞かせ給ひし言の葉を、
忍び出るもなつかしく。
人目の關にはぢらひて、
言葉もかけぬ情(つれ)なさを、

かたる人なき獨り寢の、
夢にわびしもいくそ度、
かたみにとけし赤心を、
結びし人は世にあらず。

南無と唱へて後の世を、
あつく吊らふ奧津城に、
手向の花のいろあせて、
かをりもなきに若人は、
さしかへてむと見廻せば、
あたりに花はなかり鳬。

風雅にましゝ伯母上の、

愛で給ひし百合の花、
君が手づから捧げなば、
いとゞ嬉しく思ほさむ、
いかにと問へば若人は、
そはよかんと諾ひつ。

花とはいへど谷ふかき、
千尋の底にかをるなり、
傳ふになれし里びとの、
細き緒綱をよすがにて、
いのちに代へし一本を、
いと珍らかにはやす也。

御法の花に身をわすれ、
のこる少女も止めねば、
下りゆく人もあやぶまず、
たゞ一筋をちからにて、
やすく手折りて上り來る、
縋綱は切れぬ中ばより。

みまもり居たる少女子は、
驚く外にすべもなく、
轟く胸を鎮めつゝ、
聲を限りに兄上よ、
叫ふ彼方に山彦の、
ひゞきかへして兄上よ。

疊める岩のはざまより、
千代を契て生ひいでし、
松にかくれる蔦かづら、
からむ命はをしまねど、
君か行方も知らなくに、
冥路にいなばいかにせむ。

啼く音怪しき鳥ならで、
通ふものなき谷の戸を、
をのゝきながら見下せば、
緑のもやのたちこめて、
かすかの底に聲するは、
風のしらべか谷みづか。

あたりは闇に暮果てゝ、
かぜの力はいやましぬ、
杉のひとむら音すごく、
麓にかへるすべもなく、
嵐をよげて岩が根に、
袖片しきてうちふしぬ。

峰なりひゞくつむじ風、
雲吹まきてたけり來ぬ、
底なし谷におとしけむ、
果なき空にのぼりけむ、
打ふしゐたる少女子の、
姿はさらになかりけり、

こぼるゝ露におのづから、
蘇生りたるわかうどは、
吹き倒されし椰の木の、
梢に身をばはさまれて、
衣の裾はやれしかど、
なやむ所はなかりけり。

あらしの後の雲はれて、
さやけき月に下り立てば、
かたへにふせる少女あり、
こはわきもこと驚きて、
訝しみつゝよりそひつ、

清水むすびてそゝぎてむ。

後の世かけて誓ひしを、
いかでか魂のかへらざる、
互みに面わみまもりて、
妹が泪のかゝる手を、
はらひもあへず打合し、
母こそ守りゐますなれ。

神代ながらの溪水に、
かはらぬ影の月ぞすむ、
こゝも浮世の中なれば、
共に樂しくすみはてむ、

樂敷夜やとかざす手に、
袖より落つる百合の花、

鐘 樓 守

いやしき寺のゆふまぐれ、
とひ來る人も稀にして、
すこともなくさ迷へば、
過ぎにし事ぞ忍ばるゝ。

おのれをあとに母上の、
うせたまひにし其頃よ、
こゝのみ寺に詣でしか、
はや五とせの前なりき。

ろのをりなれや鐘樓を、
　守をおうなのまめやかに、
我身の上をたづねつゝ、
　ともに袂をぬらしけり。
なほもおうなはま心に、
　あの世に居ます母上の、
供養のためにこの鐘を、
　つき給へやと許しけり。
おのれはいとゞ嬉さに、
　緒綱にぎりて二つ三つ、
撞けば響きしかねの音、
　いまなを耳に殘るなり。
過ぎし月日の其うちに、
　哀嫗はいかにせし、
鐘のみのこる鐘樓を、
　守れる人はなかりけり。
互にかはる身のうへを、
　語合はむと來しものを、
ひとり昔をとふものは、
　月より外になかりけり。

寫眞

宿のはしらに寫し繪の、
　いともらうたき少女の、

物言ひたげに掛り居ぬ。
誰が戀ぐさの種ならむ、
知らぬ我さへ惱ますは、
いかなる人か聞かまほし。
言の葉とけて睦み合ふ、
親しき中もこゝろ根の、
底の流れははかられず。
きかづとも、
假の姿のつやけさを、
己が誠にめづるこそ、
此うつし繪の心なれ。

紅葉賣

麓のまゆみいろづきて、
峰のはゝそも紅葉しぬ、
こゞしき岨をつたひ宛、
折しも小枝の二つ三つ。
やまわけ衣身になれて、
さふだを肩に賤の女の、
ゆきゝの人の袖とめて、
紅葉めさずや初もみぢ。
我も夜寒となりぬれば、
はや織りそめる立田姫、
やまと錦の濃くうすく、

照りやまさらむ夕映に。
手折るにやすき下枝は、
　さかづきもてる人々の、
しづ心なき手すさびに、
　柴の代とやなりぬらむ。
妻よびかはすさを鹿の、
　啼く音をおくる夜嵐の、
こくも色添ふ木末より、
　道やうづめと誘ふらむ。
あはれ烟と消えぬまに、
秋の形身と散らぬまに、

こゝに手折りし其色の、
　浅きぞ深きこゝろなる。
雲さへ染るくれなゐも、
　見渡すうちの眺めなり、
暮を惜みてかへるさの、
　土産にめさずや一枝を。

田植歌

しぼりもあへぬ濡衣の、
　裳裾かゝげて早少女の、
葉のぼる露のたま苗を、
　取る手暇なく唄ふなり。

妹やいかにと來て見れば、
　隣の小田にうちむれて、
唄ふや今日も彼の君の、
　聲はひとしほ清くして。
きよけき歌を我きけば、
　取る手たゆきも忘れ宛、
暮るゝも知らで千町田の、
　苗引植うるたのしさよ、
取り遲れじと急げども、
　人なきをりはろば近く、
笠をなのめに見返れば、
　言はぬ笑もていらへ宛。
なはしろ水に二つみつ、
　うつりし星を數へつゝ、
妹が唄ひしひとふしを、
　うたひて皈る山田みち。

渡守

柳につなぐなつの日も、
　霧にへだつる秋の日も、
おなじ河邊を幾かへり、
ながるゝ水に任しても、
　世は渡らるゝわたし守。

むかし思へば初めより、
馴し業にはあらねども、
世にかへ難きいとし子の、
娘は戀にあくがれて、
ちりの浮世や厭ふらむ、
こゝの河瀬の底きよき、
藻屑と消えし其日より、
おのれもこゝに渡し守、
杖とたのみし一人子に、
おくれてたどる老の坂、
殘りすくなき我よさへ、
先立行きしいとし子の、
後世をとふらふ爲なれば、
哀を汲みてたづねくる、
ひとの情は受けぬれど、
めぐみは乞はぬ渡守。

心の隔

久しくなやむ足なへを、
乘せし車もあやふげに、
曳くや優しき妻ならむ、
押はいとしきあねならむ。
幸も望みも絶えはてゝ、
ある甲斐もなき現世を、
いつ迄かくも乞兒にて、
其日〱とおくるらむ、

ひとに情はなきものと、
世をあき果し身なれ共、
親子三人のかたらひに、
樂しきふしもてる也、
富みたる家に生れても、
親はらからや妹と背の、
合はぬこゝろの中垣に、
隔のあらばいかにせむ。

四方の海を硯の水につくすとも
わか思ふことかきもやられし
俊成

霞まねはうつくし過る春日かな
支蛙

和琴緩調臨潭月、
唐櫓高推入水煙、
順

わか草

あわれ此身

奥原幽芳

君にさゝげしこの身なり、
　捧げし甲斐のあるあらば、
などか惜まむをしむべき、
　やがてぞ消ゆる露の身を。

おもへばむかしはや四年、
やよひの空ののどやかに、
匂ひこめたにひむろに、
　君のなさけに酔ひしより。
もえてぞあつき手のひらに、

　戀のほのほのわけるとき、
涼しくきよきろのまみに、
　愛のひかりのにほふとき。

われ此世はげにやげに、
　我等ふたりのよなるかと、
語りわかしゝむつてとも、
　さめてかなしき夢なりや。

たれかおもはむ春の夜の、
　楽しきゆめに酔へる日は、
やがてかなしきろの淵に、
　身を沈むべき日なりとは。

それにもまして悲しきは、
　我がせの君よあはれきみ、
をのこの身にぞ生れ來て、
　家のよつぎと生れ來て。

かくもはかなき我が君の、
　其ありさまを見るにつけ、
あゝあさましき世なるかと、
　しば〳〵われは泣ける哉。

人のこゝろのあるならば、
　誰かはおやをおもはざる、
誰かは子をばおもはざる、

うみの親にしあらなくも、
あはれ妾のあればこそ、
　かくもつらかれ我なくば、
とはにのどけきこの家に、
　さわげる涙もあらざらむ。

年ごろかけてわかきみの、
　深きなさけは身にしみぬ、
捧げまつりしまごゝろも、
　くみてぞ君はしるすらむ、

さはれ幸なきこひゆゑに、
　今はた憂きに泣かむより、

あはれこの世を夢にして、
とげぬゑにしと諦らめむ。

あゝたへがたくやるせなき、
こゝろ何時かはらすべき、
おもひを誰にあかすべき、
よゝとばかりに我はたゞ。

やよ我つまよあはれつま、
かくもつれなき世の中に、
露のいのちをながらふも、
やさしき汝のあればなり。

ひねもす憂さに沈みつゝ、
ありてこの世に甲斐もなき、
のぞみのつなを玉の緒を、
つなぎとめしも汝ゆへぞ。
うみのみ母にさきだゝれ、
世のうきふしに悩まされ、
あたし嵐になぶられて、
いとしき汝にすてられて、
何あぢきなき世のなかに、
いつまで獨りながらへむ。
汝よあはれとおもひなば、
千代に八千代の末かけて、

とはにつきせぬわが胸の、
愛のいづみにうつりてよ。

埴生のやどのいぶせきも、
みるめかるてふ蜑が家も、
なれとふたりし我すまば、
のどけき春はめぐるらむ、

あなやとばかり打寄りて、
ふるいわなゝく手の平に、
わが細うでをにぎりつゝ、
見あげたまひしまみの色。

にほへる玉のあふれきて、
わが胸のへにかゝるとき、
熱きいぶきのわきたちて、
わがくろ髪をぬらすとき。

人こそ知らね我こそ言はね、
あゝあゝあつき戀の火は、
二人の血よりもえたちて、
狂へる身をばこがすなり。

わがきみよ
暫しおもてをあげたまへ、
ながるゝなみだ、

いでやぬぐはむ。

殘る心

馴れし家居をあとにして、
　今朝立來ればいつしかに、
空のけはひもくもりつゝ、
　はしき妻をし止めおきて、
かへりみかちに立ち出れば、
　はやも時雨はふりいでぬ。
さきくと言ひしひと言を、
　あかぬ別れのなごりにて、
進まぬあしをすゝめつゝ、
　いゆきわづらう旅のそら、

行方へだつるしらくもは、
　なれも別れやをしむらむ。
殘るこゝろにほだされつ、
　ゆきてはかへり歸りては、
またもふりむく門のべに、
　ひらめくものや何ならむ、
ひれふり山にあらなくに、
　ころもの袖ぞなびくなる。

無題

林檎はたけのしたかげに、
　君をはじめて見てしより、
おもひみだれし戀ごろも、

はつはなそめの色ふかく。
葡萄のたなのしたつゆに、
袖をぬらしゝゆうべより、
ふみ迷ひにしやみぢをば、
君がなさけにたどりつゝ。
ありて此世にかひもなき、
のぞみのつなを玉の緒を、
つなぎとめにし其かみを、
思へばはかなき我世かな。
戀のひとやにつながれて、

うきしのしもとに惱され、
もゆるほのほに燒かれ宛、
焦れこがるゝ身のはてや。
あゝやるせなき我が戀を、
今はたたれにかたるべき、
人のつまとしなれる身の、
耳なしやまをいかにせむ。

星のゆくへ

いさゝ小川のゆふすゞみ、
手に手をとりて橋のもと、
うらなつかしき小夜風に。

輕きもすそをゆるがせつ、
　こゝろも飛ぶや天つそら。
ひろき虚空にきら〱と、
かゝやきいでし明星の、
ひかりぬすみておほ空を、
ながれおつる星ひとつ、
　誰がゆくへをや慕ふらむ。

せめても

仰ぐもたかきひさかたの、
　天つみくににいますてふ、
いとしの君よせのきみよ、
汚れはてたるちりの世に、
　なぞか此身をすておきて、
うきに迷はせたまふなる。
花のあしたにつきの夜半、
　たのしき夢にあこがれし、
むかしの君はかくまでに。
みだれてはやき雲のあし、
　せめては星に身をなして、
しばし姿を見せたまへ。

後朝思

見しやうつゝかはた夢か、

あらぬすさみに醉しより、
なごりに匂ふきぬ〴〵の、
わかおもひを誰かしる。

はつ花ぞめのいろふかく、
忍ぶ文字ずりひたすらに、
乱れそめにしうつり香の、
きみならなくて誰かまた。

もの〻あはれは朝つゆの、
もろきを人のならひにて、
若きいのちのあさぼらけ、
我をわすれてながむれば。

はかなき夢のこゝちして、
ひかりあせゆくわか星の、
あなたの空に消ゆるごと、
頼みすくなきわがおもひ。

びんの毛をふくあさ風や、
ほつれて殘るひとすぢに、
ながきあはれの跡とめて、
小櫛もつ手もわなゝきつ。

春雨にほふまどのもと、
色あるつゆにそぼぬれて、

羽風しめれるおさとりの、
音になく聲ぞ身にはしむ。

世の中に何のほたしも嵐山　おもふ思ひは花にのみこそ　蓮月

山路きて何やら床しすみれ草　はせを

淺茅の露

零落

野田土龍

榮花のゆめのあと絶えて、
うつろになりぬ我やどは、
なげきの枝のみさし添て。
常に親しくむつまじく、
語りかはしゝ友すらも、
宿をば訪はずなりに鬼。
昨日は腰を折りかゞめ、
かうべを垂れし村びとも、
今日は我をば余所にして。
情ありげに言ひよりし、

うからも我を遠ざけて、
　哀れとだにも見返らず。
我はあらゆる世の物に、
見捨てられたり我も亦、
　世の物皆をあきはてぬ。
さはさりながら家妻は、
今なほ我をすてずして、
　そゝぐや愛の一しづく。
愛のしづくにそぼち宛、
うたて浮世を恨みつゝ、
たのむものあはれ行末を、

守錢奴よ

足りて足らぬに身を責る、
あはれはかなの守錢奴よ、
汝がぬりごめの所せく、
積める黄金やうづたから、
よしかびぬとも朽ぬとも、
出さゞらなむ絶えて世に、
そのけがれはてたる汝が手に、
うれし黄金のもしも世に、
出でなばやがて涙なさ、
汝がこゝろのつれなさを、
こゝらの人の見ならひて、
浮世はいよゝにごるべし、

かたみの刀

晴間も見えずさみだれの、

ふるはなみだ白なみの、
あらたつ川のおとたかし、
いかになりゆく空ならむ、
あはれ夫はくにのため、
討死まさむいさぎよく、
うちしにますと兼てより、
思ひきはめしことながら、
このみ首級(しるし)を見るに付け、
尙いまさらになげかるゝ、
ゆめかうつゝか我やひと、
人やわれとも分かぬまで。
同じなげきにふしゐたる、
正行いかにおもひけむ、

つと一間にぞ入りけるゝ、
母はあやしみうかゞへば。
あな悲しきやいまはしも、
袴のこしをおしさげて、
ちゝのかたみの刀ぬきて、
あやふき樣に見えにけり。
やよまち給へやよしばし、
御身はいかにくるへるか、
事はやまりて何かせむ、
たちもけがれむ父の名も。
腹をきれとのたちならず、
國にあたなふゑみしらを、
うち平げてみかどをば、

やすめまつらむ料にこそ。
母のこ とば に正行 の、
胸のまよひははれゆけど、
あやなくそゝぐ村雨や、
首級をそでに抱きあひて。

まぼろし

うらのはやしに鳴く鳥の、
聲もさびしきゆふまぐれ、
ひざに睡れるをさな子を、
袖におほひて珠數くりて、
持佛のまへに回向する、
をとこの樣のあはれさよ、

鈴のびゞきにをさな子は、
夢やさめけむおきたちて、
あれ母さまやはゝさまや、
いづち行きます坊すてゝ、
やよ母さまよはゝさまよ、
坊をも連れてもろともに、

夢のなごりのはゝよびて、
叫びくるへるをさな子を、
をとこは膝にひきよせて、
かくろき髮を撫でながら、
悲しきことのいへはねに、
これ〳〵坊やこれぼうや、

ながは母さまはは、さまは、
いまは坊やのは、ならず、
遠きところにいでゆきて、
ひかりかゞやくの、樣に、
なりていませばいか斗り、
呼び叫ぶともきこゑじな、

いや〳〵坊のは、さまは、
今しもこ、にいましたり、
いつもの如くたはふれて、
坊をはすかしたまふとも、
聞かじな聞かじ母さまを、
呼びて來たまへ父さまよ。

たはふれこと、聞なして、
なき母したふをさな子を、
すかす言葉もくるしげに、
これ〳〵坊や汝がは、は、
なれの土産をあがなひて、
やがて歸らむかへるべし。

おとなしくして疾く眠れ、
はやく眠りて疾く起きよ、
あはれかしこき坊やとて、
なさけあふる、父おやの、
腕にすがりてをさな子は、
やがて夢路をたどりゆく。

すや〱眠るをさな子の、
こゝろなげなる面もちを、
そゞろをとこは見つめ宛、
あふるゝ涙せきがてに、
折かさなりて打ちふしぬ、
いかに思ひやせまりけむ。
打ふしたりとおもふまに、
たちまち身をばゆり起し、
け疎きまみを見ひらきて、
やよわが妻よわがつまよ、
汝はいかにして歸り來し、

おもひたゑにし此ゆふべ。
あななつかしきわが妻と、
うち樂しげに手をのべて、
引寄するよと見るほどに、
あやしの影や消えつらむ、
物くるはしくをさな子を、
ひしと抱きてまろびたり。
をりしも月のかげすごく、
かやの軒端にほのめきて、
すきもる風にあいなくも、
香のけぶりのみだれつゝ、

まだ墨いろもあたらしき、
位牌の文字をかすめけり。

正義の光

牙とぎ岩につまたて丶、
千里を越えむと企てし、
猛虎もあはれ日の本の、
太刀の光にくらめきて、
刃むかふ力なく〳〵も、
打ふしてころ磨きけれ、
義に勝つ不義や
あらざらむ。
つのふり鱗さかたて丶、
眼いからしふるひれち、

いぶき荒れたる黄龍も、
大和み魂をうちこめし、
つ丶の響におの丶きて、
海底ふかくしづみけり、
義に勝つ不義や
あらざらむ。
海に陸路にとゞろきし、
おほ筒小筒おとたえて、
ひかりまばゆき日本刀、
さやに治まる今日の空、
のぼる旭もいとゞしく、
長閑にころは照すなれ、
正義のひかり

世にみちて。

ゆびわ

亡き父君がしかりつゝ、
買ひてたまひし春秋の、
衣物も帶もあさゆふの、
煙となりて消えはてぬ。
父にかくして亡き母が、
買ひてたまひしかうがひも、
櫛も簪もいたつきの、
藥のしろと消えはてぬ。
今はた何をうりなして、
今日の煙をあぐべきか、
つゆの命をつなぐべき、

淡き粥さへつきにけり。
今はた何を賣りなして、
醫師の許にゆくべきか、
つらき病を癒やすべき、
藥のしろもつきにけり。
いかにかせまし今は此、
いのちと頼む指輪をも、
命をしさになさけなや、
賣るべき迄に迫れるを。
あはれ戀しきこの指輪、
黄金に代へて賣たらば、
樂しかるべき行く末も、
水の泡とや消えぬらむ。

をさなじみの我君が、
うばらはな咲く外國の、
ふみの林を分けむとて、
立出てましゝ折なりき。
たのめしとの印にと、
われに賜ひしこの指輪、
樂しかるべきゆく末を、
守りかためむこの指輪。
小指の痍を見するさへ、
悲しきものを年ごとに、
愛の光りはさしろひて、
侘しかるみを慰めぬ。
哀今日をばいかにせむ、

指輪抱きて死ぬべきか、
黄金に代へて悲しかる、
つゆの命をつながむか。
たのめし事のあれば社、
指輪たうとく守るなれ、
戀しき君を待てばこそ、
つゆの命もをしまるれ。
死にて待べき人もなく、
守る指輪もあらぬなり、
しかず涙ともろともに、
賣りて命やながらへむ。

× × × × × × × × ×

かまどの下にしめ〳〵と、

ゆふげの煙くゆらせて、
　ひざの小瓶の水くすり、
見ては泣也たをやめは。
小指のもとに殘りたる、
ゆびわの跡を見ては又、
泣きころ叫べわが君よ、
　心をくみてゆるしてと。

廓の土産

うかれ男よしれものよ、
太刀の手前もある者を、
いかに心のくるへばか、
　さばかり汝は狂ふらむ。
ろもゞ、汝は誰子ぞや、

親のなき子は世に非じ、
　親の子なれば知るならむ、
　　世に時めきし父の名を。
草葉の蔭にかくれます、
ちゝの恨のそのもとも、
　胸に刻みて知るならむ、
　　淺ましかりし死に樣も。
いかに愚なる汝とても、
忘れはせじなさるになど、
　只にうかれて過すらむ、
　　汝のうでには骨やなき。
骨なきものは蚯蚓なり、
　蚯蚓なりせば土を這へ、

たゝみの上に何ごとぞ、
　去らずは足ににぢりてむ。
いかに〱と老びとの、
よろめき乍ら息まくに、
うかれ男はいざりつゝ、
　小闇き部屋に隱らひぬ。

× × × × × × ×

あな美事也みごとなり、
血しをしたゝる仇の首、
　今にも死なむ老の目に、
　さやに見んとは思きや。
ふかき心もしらずして、
うかれ男よみゝずまと、

たゞに罵りさみしたる、
　昨日の我のはずかしや。
ゆるせう孫よ許せかし、
汝はまことのわが孫ぞ、
　今日より後は汝が父の、
　亡き跡つぎて世に出よ。
草葉の蔭のなきたまも、
汝の手向をまちまたむ、
いざ〱かゝれ血刀に、
　仇のかうべを貫きて。
爺も歸らむ汝がために、
力添へたるうかれ女も、
　連れて歸らむ汝が爲に、

栄行く千代の友として。
おきな若人うかれ女の、
打連れ勇み行くなべに、
くるわの柳なびきつゝ、
なくや鴉のかう／＼と。

西行法師

年たけて又こゆべしと思ひきや
いのちなりけりさ夜の中山

冥々

浅茅野や露の上ゆく影法師

紀齊名

野酌卯時桑葉露
山畦甲稲花風

うき草集

田舍驛夫（上）

玉造小萩女史

今日のあつさを告げ顔に、
晴れゆく雲をながめつゝ、
背子は今しも行きましぬ、
おのがつとめと停車塲に。

ちからのあたひ安き世は、
ひねもすあれぎ稼きても、
米のむくゐはたゞわづか、
われらか餓をしのぐのみ。

からき浮世のつねなから、
肌へもとくるきのふ今日、
ゆきかふ瀛車に旗ふりて、
くらすみ心いかならむ、

いで湯よ瀧とほてりかに、
なつもあつさも水かげに、
さけます殿もわが背子も、
たねはかはらぬ人なるを。

歎かざらまし世はかくよ、
つらきうき世と問ゆれど、
あした夕べにわらひつゝ、
おくるたもとは塵もなし。

あめつゆ凌ぐわら小家も、
妹背うれしくむつましく、
手をとりかはし我すめば、

さながら玉のうてなにて。
得つるまうけは少きも、
うはべの飾りねかはねば、
自から世も身も足りて、
これよりうへの慾もなし。
まして樂しやゐとのつき、
二人がなかにまなし子の、
かはゆき聲を聞きゝより、
なぐさめられつ慰めつ。
背子が勤めに出ます間も、
我はさびしきこゝちせず、
頰すりつけつ手握りつ、
乳房ふくませゐやしつゝ。

稚兒ども〳〵に暮す身は、
なつも暑さもなにならず、
窓ゐけ山を見わたせば、
こゝろもひろく風すゞし。
今日だに送り待ち待たば、
ゐすはかへりて背子も亦、
ひと日を家に並ひつゝ、
笑ひかはしてくらすらむ。
ゐつき日影を背にうけて、
つとむる君をおもひては、
一日空しくゐらるべき、
をみなながらも只かくて。
きぬや縫はまし針とらむ、

うらの井戸より水くみて、
あらひ濯きて來む秋の、
用意もはやくとゞのへむ。
稚兒よねむれよ小枕に、
みなみの風のかよひきて、
うちはも高くたち舞ふよ、
衣とりはづしかぜひくな。
まどの障子に手を添へて、
なかば閉しにわれたては、
滊車の笛ころなりひゞけ、
脊子やふるらむ旗あげて。

(下)

田草なびけてさよ風の、
身にしむばかり渡る哉、
木々木末になく蟬の、
こゑ〳〵高く日は暮て。
暗きみ空をくまどるや、
あなたの山の松ひと本、
二ひら三ひらむら雲も、
動くや星のかげうすき。
一日のつかれいと重く、
手さへ足さへなやめども、
いま一滊車のことはてゝ、
我身の業もをへつべし。
明日は非番のやす〳〵と、
ひと日ねむらむわか家に、

はしき妻子とならびつゝ、
あつさを風に追はせつゝ。
いましばしなり今しはし、
月ものほらむやまごしに、
つゝ袖とほるさよ風の、
夏のものともおほえぬよ。
あまりに風のすゞしさに、
晝のつかれもあらはれて、
ねむたくなりぬ今さらに、
あはれこの滊車など遲き。
いましばしなり今しばし、
しばし〳〵としのぶれど、
遲れし滊車を待ちがてに、

いつかねむりの誘ひきぬ。
レールのうへに旗たてゝ、
いまか〳〵と來む滊車を、
待てる驛夫はわれしらず、
いつか夢路をゆきかへり。
つとめ勵めどいそしめど、
足らぬ黄金やかぞふらむ、
こひしき妻のかほ見つゝ、
稚兒あやなして遊ふらむ。
とゞろきしりて眞鐵路を、
今かとびくる滊車の列、
あはやま近くせまれるを、
あやうし夢はなほさめず。

砂吹くかぜのたちまちに、
驚き見ればすさましや、
とゞろくとひと筋に、
突き來る滊車は眼のあたり。
よろめき惶て身をあとに、
ひかむとするも夢うつゝ、
立てる小旗に我が足を、
あなすくはれて地の上に。
滊車はたゞちに進みきて、
またもたゞちに進みゆく、
われとも知らず倒れふす、
あはれの頭かすめつゝ、
夜半のしづけさ破りつゝ、

哀しきしらせひろまりぬ、
西に東に停車場に。
ひところはしれ聲たかく、

よきりし滊車にあな哀れ、
驛夫の頭血にそみぬ、
ともたすけに玉の緒は、
ありやなしやに繋げども、
草木しぼみて水ぬるむ、
此堪へがたき暑き日を、
暮の命もはかられぬ、
やまひの床に打ふして。
うごめき叫ぶ彼よりは、

細きかひなに子を抱き、
　涙のみつゝ看護（みとり）する、
　　妻のこゝろやいかならむ。

化粧の水

耕しかせく家の子が、
歸りし夜半の千町田の、
早苗の底にながめけむ、
　むかし戀しき月のかげ、
騒く絃の音たかとの、、
なりはひ辛き夕まぐれ、
化粧の水にうかべ見て、
　みろらを仰く姫もあり、

虫おくり

月のひかりもほの暗き、
　かた山里のあせつたひ、
松の火つらね村びとが、
　合すはやしの哀しさよ。
植つけすみし畠ちかく、
荒せる虫をつくさむと、
　集ひ歩むかをり〳〵は、
　　鐘の音さへも通ふなり。
米の價値（あたひ）もつゆ知らず、
酒よ肉よと飽けるきみ、
　かゝる有様見たまはゝ、
　　身にろしむ覽いか斗り。
思ひ續けてたゝすめは、

野末や周るはる〴〵と、
松の火かげも立消えて、
かすかにひゞく鐘の音。

姫つかさ

むすべる霜も烟りつゝ、
かたき氷もぬるみつゝ、
雲井の庭のおくふかく、
冬のぼるへき時はきて。
青きみ空のたゞなかの、
うかふ柱にもたれまし、
世をみそなはす大神は、
さくら櫻とのたまひぬ。
かしこき詔ほがらかに、

敬ひはこぶ風ふけば、
奇しくも香る閨の戸を、
ひらく櫻のひめづかさ。
おのづからなる白妙の、
きよき肌へを色とりて、
眉うるはしく紅さすは、
誰に見よとの化粧かも。
わらひそめたる頬の上、
幾その媚をかくすらむ、
雲にのり行あたりには、
風やはらかに起るなり。
てゝたのみ庭渡りこえ、
大神ちかくとめゆくを、

去年の紅葉もやま栗も、
　闇にさゝやく聲もして。
今か三つ四つ庭ふゞき、
めぐらす幕もひる返り、
かみのよりますみ柱の、
　尊きかけもをがむべし。
姫は胸さへときめきて、
赤きかざしもふるふ時、
あな美しとより添ふを、
　見やれはをかし雪の君。
「てはめづらしや雪の君、
今年はいかに世の中を、
降て包みて木々の枝に、

花をや咲かせ給ひしぞ。
うたげしをへて貴人が、
かへる夜路を埋めては、
かたく板屋かへりみぬ、
　罪をせめさせ給ひけむ。
藁うちはじめ賤の男が、
稼く軒はをかくしては、
足るを知りつゝ貪らぬ、
　心ほめさせ給ひけむ。
明くる朝に野をやまを、
たゞひと色に散る時は、
今年もあはれとよ年と、
　喜びを以て迎へられ。

くるゝゆふべに都路を、
ひと足とめて飛ふ時は、
寒さの種よさわりよと、
わざけられけむ恨もて。
よろこび恨とり〱に、
つもりてとけて忽ちに、
神のみめしに君ははや、
雲井にかへり給ひしか」。
さゝ涙岸によせくらむ、
やなきや雨を拂ふらむ、
やさしき聲を楽しげに、
やゝ聞き居たる雪の君。
「雲井の庭に住みなれて、

年毎見れど見かはせど、
姿のみかはてゝろまで、
床しさまさる姫つかさ。
ことしも頃ははや彌生、
霜風まねくわれ去りて、
姫が手をもて人の世を、
花の香みたす春はきぬ。
神の仰せと言ひながら、
下界はる〱ゆく姫を、
にごるうき世の人々は、
何とてあたに見過すぞ。
降て積りてはた解けて、
常なき世をはさし示す、

我をうかれて見過すと、
おなじ眼にひめもまた。
夢にうつゝに迎へられ、
やがて散らなむ雨風に、
咲く間遅しと待ち焦れ、
見はやす人は多かれど。
花もよし野のはる風は、
袂そよがせ見るひとも、
衣のよしあしさゝやきて、
黄金をほこるはれ化粧。
月もすみ田の川みづに、
まかせて流すやね舟も、
調べいやしき絃の音に、

まひ姫さわぐ世の中ぞ。
塵なき姫がみすがたに、
けがれぬ心たゞへつゝ、
まことの花を觀る君は、
いづくの里にひそむ覧。
斯みそなはし悟りまし、
なほ年毎にひとの世に、
姫をおくらすおほ神の、
おほみ心ぞいぶかしき」。
眞白き袖をはらひつゝ、
涼しき聲もおのずから、
涙あふるゝゆきのきみ、
姫は幽かにうなづきて。

「實にことわりよ述べ給ふ、
君が言葉のはし〳〵や、
下界のひとの片はしも、
かくと悟らは嬉しきに。
春を宿してねもごろに、
咲かする花をいたづらに、
ふくべの水にけがし宛、
見過す世こそ哀しけれ。
神の仰せにくだれども、
何をたのまむ浮世には、
筆かをらせて我なみだ、
歌ふ詩人もあらぬ世は」。
歌ふ詩人もあらぬ世と、

さゝやく姫も聽く雪も、
面わまもりてある程に、
またも召します神の聲。
おどろき急ぐ姫つかさ、
雲のりすてゝ見渡せば、
神のみ前にぬかつくは、
さへづる小鳥春かすみ。

裏窓

みなみの風もそよ〳〵と、
うす雲はるの夕日かげ、
せばきさかは邊の家の、
うら窓そむるいろあかし、
をりしもをかし一しきり、

誰が家の姫か習ふらむ、
水をわたりて聞ゆる、
絃のしらべと歌のこへ、

徒にやすき我身うはつかしき　　伏見院
くるしむ民のこゝろ思へば

蓮の實にはぢかれてたつとんぼ哉　　千代女

白波惣太夫

橋上立聲求一錢、　可哀乞食幾千々、
人間富貴水中泡、　昨日綺今日亦遷、

初もみぢ

堤紅蔭女史

すがたのみかは心さへ、
かたぶく月
いとも優しき少女子の、
ふりわけがみの昔より、
睦びかはしゝ友ありき。
かすみ棚引くみ吉野の、
吉野の山のさくらがり、
胡蝶ならねど君とわれ、
花の木蔭にくらしつゝ。
草葉の露のはら〳〵と、
風にみだるゝ夕まぐれ、
つゝみの螢おひながら、
家路忘るゝをりもあり。
秋さりくれば村しぐれ、
そめいだしたる初紅葉、
枝にかゝれる月かげを、
ひとり見る夜は少くて。
風さえわたる冬の日も、
み雪の花をふみわけて、
とひつとはれつ窓の内に、
ふみよみ交す日ぞ多き。
音も清けきさゝなみに、
こゝろの塵を洗はむと、

礒べづたひに辿り來ぬ、
　蜒の苫屋のほどちかく。
かたふく軒に只ひとり、
　彳むひとのありたりき、
見とはなしに打見れば、
　いとなつかしき我友よ。
やがて入りつゝ其影は、
　消失せたれどいにし年、
むつび交しゝわが友に、
　まがひはあらじ我友に。
浮世の風のいかばかり、
　あらくありけむ黒髪の、
緑のいろもあらなくて、
　乱るゝ樣こそ哀れなれ。
布のころもを纒ひつゝ、
　姿やつれて見ゆれども、
こゝろの花は今もなほ、
　うつろひやせじ今も尚。

望める業のとげがたみ、
　世を歎つとぞ人にきく、
いかにくるしき村肝の、
　こゝろの程はいか斗り。
胡蝶の夢のさめはてゝ、
　恨みやすらむあすか川、
昨日の淵は今日の瀬と、

かはる習を見に知りて。
あはれ今宵も磯のべの、
蜒のすむなるかの宿に、
昔のはるをくりかへし、
涙にそでやしぼるらむ。
變りはてたる人の上を、
神ならぬ身の知ずして、
よそに見し社悲しけれ、
めぐりあひては今更に。

火影を暗き小簾の中に、
かたぶく月を眺めつゝ、
友よあはれと少女子の、

幽かにかこつ聲きこゆ。
ましばうり
かみもけづらず布のきぬ、
身にまとひつゝ少女子の、
春のさくらをよそに見て、
秋のもみぢをよそに見て。
昨日も今日もまだきより、
みやこ大路をゆきかへり、
ましば〳〵と賣りありく、
輕きたもとのやすげなる。
うき世のほかの谷みづの、

音きゝながらこのゆふべ、
　かへりやすらむ山ざとに、
　雲のあなたのやまざとに。

廊下つたひ

あさ吹く風にそでかへし、
廊下づたひにとめぐれば、
　をすのゆらぎにかの君の、
　影ほのみゑてかつ消ゑぬ。
そゞろありきの夕まぐれ、
庭のまつかぜおとたゑて、
　あなたの笛のしらべをば、
　外(よそ)に聞くさへなつかしや。

うつしゑ

春のさくらはうつろへど、
　かはらぬ君かうつしゑは、
こゝろの花のおもかげの、
　かつも匂へるうれしさよ。

寫眞

乱れがちなるつま琴の、
さらひもをへしての朝、
　眞萩はな咲く庭の面を、
　さ迷ひつゝも有たりき。
千里のそらを雁かねの、
懸て來にける文見れば、
　仄かに豫て聞きつれど、

未だゑ知らぬ人にして。
書流したるみづぐきの、
跡うるはしく覺ゆるを、
添て賜ひしうつしゑの、
姿もことにきよらなり。
ふみの林にさきにほふ、
花を手折りて睦まじく、
あそびし程に玉づさの、
行交ひ繁くなりにけり。
ほのめく月に端居して、
物思ひなればかの君の、
いとも嬉しき文はきぬ、
添へにし歌の其うちに。

「いとまあらば
來てもとへかし我宿は
あはれに君を
まつむしの聲」

世はわやにくに障多み、
とふも心にまかせねば、
月と雪とをひとり見て、
恨みながらに年を經ぬ。

× × × × × ×
× × × × × ×

世に名もたかき吉野山、
花のさかりを傳へきゝ、
のどけき風に送られて、
櫻のかげに來たりけり。

あはれ床しのかの君が、
霞むあなたの橋の上に、
彳みませるみ姿は、
此寫しゑにまがはぬを。
嬉しきあまり言の葉を、
交さまほしく思ひつゝ、
ためらふ程にかの君の、
かげは霞と消えてゆく。
日影うすれて咲き匂ふ、
花も色なきこのゆふべ、
袖の薫りは身にしめど、
尋ねむ由もなかりけり。
はるけき空を眺めつゝ、

朝なゆふなに慕ひてし、
君に今しもゆくりなく、
逢ふと見てしも夢心持。
思ふ思をうちけして、
われから我を慰めつ、
こゝろの月の隈もなく、
此うつしゑに語らばや。

お不二さん霞の衣ぬがしやんせ
雪の肌へが見たいわいな　　蜀山人

名月やもたれてまはる椽はしら　　柏風尼

三千世界眼前盡、
十二因緣心裏、　　都頁香

みなわ

黄金縄　　花井燕女

み親の飢に泣きますを、
泣きてつれなき夫定め、
あたら神より受得たる、
自由の翼はかなくも、
黄金の縄につながれて。
心にそはぬあだし男に、
妻よ〳〵と呼はるゝは、
夜刃よ鬼よとひ人に、
打さけばるゝ心持して、

魂も消ぬべく思ほゆる。
アヽ變人よわかきみよ、
契りたがへしわか罪を、
責めて恨みて此身をば、
疾く〳〵殺せ殺しませ、
殺すぞ君のなさけなる。

いぢ悪の世はいつ迄も、
不幸の闇におしこめて、
をんなの道よ操よと、
壓制のしもとたゝき宛、
徒に我をはおろぶなり。

今のうつゝ

いたづらに、
かひなき戀にあこがれて、
人のつらさをうらみつゝ、
儘ならぬ世とかこちしは、
よわきこゝろに、
もつれしゆめよ。
あたゆめの、
さめての後のこゝろには、
浮世もまめにかしづきて、
うらみむ人もなかりけり、
げにものどけき、
いまのうつゝや。
すげがさに、

あめつゆ淩きつすでもに、
風をよぎつゝにしひがし、
こゝろの儘にめぐる身は、
　暮れゆくさとを、
　　やどとさだめて。
つくつゐの、
竹のこゝろのむなしきを、
こゝろとなして歌ひつゝ、
めぐりゆく身は玉の緒の、
　絶ゐなむ野べを、
　　おくつきにして。

今　昔

不運に泣きしいにしへを、
　いまの榮華におもひ出て、
うから語らふたのしさに、
　泣きし不運のをがまるゝ。

薄　む　ら

あらしに月の雲はれて、
ひかりますほの薄はら、
花をあさむく手弱女の、
か黒き髪をふりみだし、
いばらに裳裾引かれ宛、
　うち狂へるや何ならむ。
きろりと据し目の玉は、
　くやし涙にうるみけむ、

いづくともなく見詰たる、
姿は夜叉かはたあく魔、
笑むよと見れば又泣て、
のゝしる聲の物すごや。

つれもなき世の習より、
我戀斷たむとひと〱は、
責めさいなめど何やまむ、
戀しき君のおなじ世に、
いませるほどは何やまむ、
よし玉の緒は絶ねとも。
疾々死ねよとばかりに、

責れどいかで我死なむ、
世の物皆をほろぼして、
我世造りて君とふたり、
心たのしくとこしへに、
自由の戀の神とならむ。

見よ〱妻よ彼處なる、
つゝき村たつ松か根に、
たてるは孃よわが孃ぞ、
なにがしろとて兩親は、
闇ならぬ夜も子を思ふ、
心のやみにくるひつゝ。

情わならく四つの手に、
　狂ふ少女のもろ〳〵でを、
ひしと捕へて目をすりて、
　なにとて汝は斯ばかり、
物狂はしくなりつらむ、
　はや歸り來よ我むすめ。
あな恐しのわかをにや、
　あなおそろしの青鬼や、
なぞて妾につみやある、
　はなせ此袖とくはなせ、
神よほとけよ我きみよ、
　救ひ給へやかけり來て、

淺ましき哉ふたおやを、
　鬼よと叫ぶ汝が目には、
いかなる雲かおほふらむ、
　とく〳〵歸れ今宵ころ、
にい妹とせの笑顔をば、
　闇もる月のてらすらめ。

冬田家

門田の面はこほりとぢ、
　畦はみ雪にうづもれて、
人目も草もかれはてし、
　山田のさとの賤かやも、
朝日の影はしかすがに、

軒の垂水にきらめきて、
みきりの松に這ひ上る、
烟もゆだになびくなり。
窓に機をるしづの女が、
ひなぶり唄ふ其ふしも、
諸肌ぬぎてしづの男が、
土間に藁うつ其おとも、
籠にふせたるには鳥の、
はぶきつゝなく其聲も、
むつび語らふ如くにて、
いとも豐かに聞ゆなり。
心にかなふ子をもちて、

やさしき婦にかしづかれ、
むかし語りに笑ひつゝ、
老のさかゆく今の身は、
願ふ未來もあらぬぞと、
ゐろり圍みて今日も亦、
う孫に酒をくませつゝ、
おきなゑむ也鬚なでゝ。

戀の自由

戀の自由のたうとしや、
汝のまへには釋迦もなく、
耶蘇も孔子もあらずして、
國のおきてもあらはこそ、
思ふが儘にちぎりつゝ、

世を長しへにつなぐなり。

戀の自由のたうとしや、
月日の影はかくろへど、
汝がひかりは絶間なく、
生としいける物みなの、
胸底深くきらめきて、
世を長しへにつなぐなり。

拈來瓦礫是黃金
弄得死蛇成活龍

魚釣の編笠ひとり小春哉
曉臺

幽花一枝

從二位伯爵東久世通禧

ことの葉の
ふみのもやしに
わけいれも
風にしつけき
もなの香そする

幽花一枝

金子知﨡

田の畔

蛙つまよぶ田のくろに
草くひあきて打ねむる
うしの額をなでながら
しづの童うたてりける
折しもわれや香はしき
桃とさくらの笑うけて
少女子二人ほどちかく
袖ふりはへて來りけり
知らぬふりする童の
肩をゆすりて親しげに

なに戯れていますぞと
戯れなから寄り添へば
童は彌々知らずげに
笑るゝ顔を笑むまじと
口をつぐみて目を閉て
强ちにころこらへしが
右ひだりより少女子の
打ころぐるにゐも堪で
許して給へゆるしてと
身をき宛ゐらぎけり
童のゐらくろのこゐに
眠れる牛のおとろきて
おきたつ儘に少女子は

おなやと弖り逃去りぬ
菜のはなにほふ畑中に
逃れし少女にこやかに
此方の畔をながむれば
童も笑みて見かへしぬ
ひとりの少女こゐ高く
今宵は來ませわか宿に
よもぎ餅して待べしと
童を呼びて言ひければ
一人の少女やさしげに
今宵は來ませ我家にも
こゝろ土筆の甘羮して
君待べしと言へりけり

童はすーとばかりにて
稍へたちゆく少女子の
うしろ姿を見おくれば
呼びとめ顔に牛ぞなく

吉野山

つまのため
こゝろづくしも嵐ふく
よし野の山の冬のそら
花にまがひてふる雪も
そでの涙を添へにけり
いのちこそ
盡せざりけれ今よりは

ふたゝび夫にあふ由も
なみだに曇る吉野やま
歎きの雪のみ積りつゝ
見るとても
嬉敷もなしますかゞみ
こひしき人の影をだに
留ぬ形身とをろ〳〵に
うけし心やいかならむ
いつしかと
涙にくるゝ日のかげに
夫と妻とはふたみちに

別れこそすれ相したふ
こゝろは同じ道ならむ

花 二つ

かすみやへだつ春の空
天つ日影ものどかにて
吹く風にほふ花のかげ
われは顔にも床しめて
花はつかしき手弱女の
ひざに寄添ひゐで人の
玉のさかづき手に取て
ひさごの酒を酌ませ宛
浮世をよそに睦みあふ
其樂しさやいかならむ

思へばこひし我むかし
思へばくやし今日の我
生れながらの乞兒とや
人は思ひてさげすめる
我もむかしはゐで人に
數まへられて敬まはれ
浮世の様も知らずして
十年廿とせすごせしを
愚なる身の甲斐なしや
なさけも深きわが妻の
涙をそでにおさへつゝ
まごゝろ籠て諫めしを
空ふく風ときゝすてゝ

ふみ迷ひけり戀のやま
のぼりつめては仲々に
顧みすべきひまをなみ
畏きわたりの務めさへ
怠りがちになりけるを
知ろしめしたる父君は
たけき心にいとゞしく
いかりましけり家の爲
今日を限とのたまひし
その一言をなごりにて
佗入る術もなさけなや
　親子のゑにし絕にけり
　妻のゑにしも諸ともに

たゞ一人ます父きみに
振捨られし身はやがて
世にも人にも見放たれ
とりつく島もあら淚に
たちへだゝれて天地の
廣きが中にやどもなく
昨日はひがし今日は西
明日の日影も賴みなき
つゆの命をつなぎつる
菅の小笠も破れはてゝ
ひと目も恥もあら莚に
身の成果をさらしつゝ
ひとの軒端にさすらひて

物乞ひありく苦しさよ
せめて哀とおほしめす
人だにあらば嬉しきを
犬には追はれ童べには
見苦しとのみ除られて
　あゝうたてきは世の習
　あゝつれなきはひと心

さはれ乞兒の身也とて
厭ひはつべき浮世とは
思はざりけり夢にだに
あやも錦もまとはねど
黄金も玉もつまねども

おのづからなる天地の
くしきけしきは長へに
へだて心もあらずして
疎きし身をも慰さめぬ
　あゝたのしきは天地の
　自らなるけしきよな

天つ日影ものとかにて
ふく風にほふ花のかげ
侍付く女はあらねども
くむべき酒はあらねども
かすみの奥になく鳥の
聲も樂しくきこえつゝ

木の間に輕くまふ蝶の
はねかあらぬか荒菰の
袖にかゝりて匂ふなり
ゑみこぼれたる花二の
　香さへいろさへ姿さへ
　心ありげにおもほゆる

日本刀

大和男の子が　たましひ籠で
鍛ひに鍛ひし　日本刀の
霜のあしたに　こほる夕べに
　錬にねりたる　日本刀
鞘をはなてば　夏なほさむく
きらめき渡る　稲光り

あるゝ百鬼も　まなこ暗みて
　にげこそ惑へ　遠近に
一度ふるへば　たちまち空に
雲たちさはぎ　風荒て
樹は倒れふし　草はしをれて
野べも山べも　あらばこそ
二度ふるへば　たちまち前に
高きかばねの　山を築き
　ふもとの川に　血汐ながれて
つゝみも橋も　あらばこそ
三度ふるへば　拭ひしごとく
雲はれわたり　風なぎて
かゝやき出る　天つ日かげに

晃めきあへり　目も綾に

折にふれて

この世はわづか五十年
夢の浮世とながうちて
心のまゝにすごしなば
長き未來をいかにせむ

きぬた

まりきのもとのきりぐす
こゑもかすかに小夜ふけて
夜をながかれとしづの女が
ころもうつころあはれなれ

初雪

野洲のかはらを來てみれば

つゝみもはしもしろたへに
はつゆき降れりしづの女が
ぬのかさらすと見るまでに

ふみ

われもまた
おもひをこめて　ふでとりて
ふみかきのこし　のちのよの
ひとにみせてむ　いにしへの
ひとのこゝろの
ふみにみゆれば
まぎれぬ思
いとしきあこの爲にとて
このめる酒ものまずして

汗にあびつゝうけねたる
塵もつもりてやう〳〵に
世の交際もかゝぬまで
なりにし者をあなあはれ
老いゆく末のはしらとも
杖ともすがりたのみてし
かひもなみだの露わけて
草葉のかげに亡きあとを
とふらふ親のこゝろをは
しろしめさぬかみ佛は
我子をおもふこゝろには
はなも紅葉もあらずして

田の水にゆるなつの日も
しもはしらたつ冬の日も
つらさ覺ねずつとめしが
今は誰がためたがやさむ
荒れむとならば荒よかし
あるゝが儘にまかしてむ
生ひむとならば生よかし
生ふるが儘にまかしてむ
いまはかへさむ鍬もなく
くさきる鎌もあらぬなり
うらみかひなき世の中の
つらさ忘れむすべもがと

あさな夕なにたゞまなく
あぢなき酒におひつれど
なき子を思ふおもひころ
さめぬ醉にもまきれざれ

露宿

やまのはに、
日は名殘なく、暮れはて丶、
うし追ふ童も、かへりたり、
花つむ少女も、かへりたり、
夕べの野べを、吾にゆづりて。
いでさらば、
かしこの松の、したかげに、

菰うちしきて、こよひまた、
のどけき夢を、むすびてむ、
うらふく風を、枕ともして。
やまのはに、
さやけき月の、あらはれて、
千草のつゆは、きらめきぬ、
こゝらの虫は、なきいでぬ、
野川のみづの、音もすみつゝ。
さゆる目に、
野面をのみて、あめつちを、
袖につゝみて、寝ころべば、

何たはれてか丶　まつかぜは、
しづく溢して丶　空にうたへり。

明　日

昨日も今日もおとつひも、
おもふ人にはあひながら、
いはでのみころ過にけれ、
こゝろばかりをくだき宛、
夜毎よごとにおすころは、
かならずいはめ必らずと、
おもふおもひに焦れつゝ、
おもひきはめし其ことを。
言はでやむべき戀ならば、
いはれぬ迄もこゝろをば、
くだかじ者をおはれわが、
賴める明日はいつならむ、

ねむり

小田のかはづなく聲を、
むかしやさしき我乳母の、
ろひぢの歌にきゝなして、
ねむる夕べのこゝちよや。
願ふねがひもおこらねば、
思ふおもひもあらずして、
あめつちをさへ家をさへ、
人さへ身さへわすれつゝ。
長閑にねむるそのほどは、
うきよの塵もろますして、

こゝろやすけく楽しきを、
さめぬ夢路やいかならむ。

なさけの跡

むしばめる、ふる木のごとき、
しこのをとめよ、しこめよと、
はしたなく、さかなきひとの、
かれをさみする、うたてさよ。

いはまもる、しみづのごとく、
かれのこゝろは、いときよし、
そこひなき、わたつみのごと、
かれのなさけは、いとふかし。

ちりだにも、すゑぬまたまの、
こゝろやさしき、をとめ子に、
いかなれば、造化のかみは、
かゝるおもわを、あたへけむ。

はらぐろき、をみなにさへも、
造化の、かみの、さりげなく、
ゆきのはだ、はなのおもわを、
あたへられしぞ、こゝろえぬ。

たりてなほ、足ること知らぬ、
ひとのこゝろの、うたてさに、
よきあしき、見わかぬさまに、
かみはことさら、つくりけむ。

しかならむ、　うべしかならむ、
ひとはして女と、　さみすとも。
われいかで、　かれのなさけを、
ようにすつべき、　こゝろかは。
かれにして、　して女ならずば、
さらぬやみぢに、　さまよひて、
なか〳〵に、　われはあやしき、
こひのやつこと、　なりつらむ。
してめにて、　ありつるからに、
かれとわれとは、　すゑながく、
いにしをば、　むすびかためて、
こゝろのごけき、　こひぞする。

吹きすさふ、　小夜あらしにも、
かれのなさけは、　身にしみて、
ふりしきる、　あめにもかれの、
きよきこゝろは、　うかふなり。
あさゆふに、　おもひぞいづる、
去年のあきべの、　ゆふまぐれ、
みかづきの、　かげほのくらき、
やま田のあきの、　ゆふまぐれ。
かりがねを、　そらに聞きつゝ、
おしねかる手の、　くるひけむ。
刃もさえし、　とがまはしりて、

をゆびきりそぎ、　なやむをり。
ほどちかき、　いさゝ小がはに、
手をそゝぎける、　かれをとめ、
目さとくも、　それと知りけむ、
おとろきふりに、　はしりきつ。
あなにくき、　とがまにこそと、
わが手をとりて、　まめやかに、
ほとはしる、　あけのちしほを、
あらひくれたり、　田のみづに。
血しほをば、　あらひしやがて、
かれはかふれる、　手ぬぐひを、

をしげなく、　ひき裂き破りて、
まとひくれたり、　きずぐちを。
そのきずは、　しばしのほどに、
あとさへ見えず、　癒えはてゝ、
手ぬぐひの、　きれにしみたる、
血しほのあとは、　のこりけり。
みずに湯に、　かけてあらへど、
血しほのあとは、　消えぬなり、
あはれこや、　しこのをとめが、
ふかきなさけの、　あとにして。
うつしゑ

きみゆへに、
思ひやつれしこのすがた、
君にみせむとうつしゑに、
寫しとりたるこのすがた。
なつやせと、
只にみまさはいかにせむ、
君にこがるゝおもひをも、
共にうつさむすべやなき。

岩と水と

みつよつふたつ星かげの、
ゆふろら高く見ゑろめて、
物の音たゑしみやまべの、
しづけき中にさら〱と、

谷間をくゞるましみづの、
岩にさゝやくこゑ聞けば。
「あはれうたてや岩のきみ、
などてか君はこゝろなく、
わらはをよそに見給ふぞ、
よし苔ごろもきたりとて、
うちにはもゆるはつ戀の、
春のこゝろもあるものを」。
恨むがごとく泣くごとく、
岩のひざべにうちふせど、
こゝろを露もうごかさず、

ねむるがごとき岩が根に、
水のこゑのみむせびつゝ、
打ひゞくなりたえまなく。

ひとつ家

おもひいづる去年の秋、
くさふみしだき露わけて、
月のよな〳〵おとなひし、
野ずゑの岡のひとつ家。
ふゆはみ雪にみちたえて、
ほゐなくよそに隔てたる、
野ずゑの岡のひとつ家、
いかに淋しくまつならむ。

いでとばかりに宿たちて、
あゆむや野路のおひ風に、
そでをなびけて我ゆけば、
しるべがほにも胡蝶とぶ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

かすみの袂ふりはへて、
とめ來し岡のひとつ家、
思はぬさまにあれはてゝ、
とへど答ふるこゑもなし。
去年にかはらぬはつ聲に、
かどの小鳥はかたれども、

むかしの春をしりがほに、
のきばの梅はわらへども。
かのほゝゑみし少女子と、
よく語りてしおきなとの、
かげなかりせば哀れわが、
こゝろの春をいかにせむ。

見もてぬ夢

いづち行かむと何處より、
此身はこゝにきたりけむ、
右もひだりもおとさきも、
たゞぬば玉のやみぢなり。

そもこはいかなる處ぞや、
うきよの中かあらざるか、
まなこにうつる影もなく、
耳にきこゆるおともなし。

月日のかげのとゞかぬは、
奈落の底にやあるならむ、
逃れいづべきすべだにも、
あらねば魂も消ぬならむ。

折しもあれやあめつちの、
烈しくとゞろく其おとに、
忽ちこの身はうちたふれ、

ものも覺えずなりにけり。
やう／＼こゝろ打しづめ、
あやめもわかぬ闇の中に、
あたりの氣色を眺むれば、
二つのひかりほの見えぬ。

赤きひかりやなにならむ、
青きひかりやなにならむ、
赤きはいかりの魂なるか、
青きはうらみの魂なるか。
見るまに光りひろごりて、

闇をふたつにくまどりぬ、
赤きはほのほの川となり、
青きはみづのかはとなり。

ほのほと水とのたゞ中に、
ほそき橋さへわたされて、
身はたちまちに据られぬ、
あやふき橋のそのうへに。

「やよわが君よなつかしや、
とく／＼來ませ」と呼聲に、
あなたの岸をながむれば、
こひしき人ぞたてりける。

あなよろこばしあな嬉し、
あさな夕なにこひ〳〵て、
戀れし少女のゆくりなく、
「いかでかしこに招くらむ。

あなたのもしきゆく末や、
交すなさけをいのちにて、
つきせざらなむ我こひは、
此世あの世のきはみまで。

行かむと思ふうしろより、
わが母うへのゆくりなく、
よびます聲のきこゆなり、

「やよ待てしばし我子や」と。

たちかへらむか渡らむか、
わたらば母にそむくべし、
かへらば少女は怨むべし、
たちかへらむか渡らむか。

如何せましとたゆたへば、
はゝも少女もくやしげに、
前うしろよりあゑぎ來て、
やらじと袖をひきあひぬ。
ひきあふ袖をはなたむと、

あせるまもなく橋たえて、
ほのほの中に落ちたりと、
見えしはまこと夢なれや。
ともし火くらき闇の中に、
二人のかげをたどれども、
うつゝの影は見えやらで、
夢のかげのみのこりつゝ。

蟬

こゑかぎり、鳴けやらむせみ、
つれもなき、うき世のさかを、
なみだなき、ひとのこゝろを、
なきてうたへよ。

ひさかたの、あまつみかみは、
あはれとも、きこしめすらむ、
よしや世は、さわがしとのみ、
ただに聞くとも。

案山子

をしねほす、
山田のくろの、　小くさはら、
露にそぼづの、　やすらかに、
倒れふしたり、　やすらかに。
あはれ汝は、
そのまゝ霜に、　身をまかし、
朽果てむとも、　さはめしか、

如何こゝろや、　ゆるびけむ。

あさゆふに、
動きもやらず、　かたらはず、
弓矢たばさみ、　小田もりし、
汝がいさをは、　いとおほし。
あはれ汝が、
其いさをしの、　むくゐをも、
よろに見捨て、　たふれしは、
何にこゝろの、　たらひしぞ。

去年の春

のきばの山のさくらばな、
今年のはるもおなじ香に、

「さきこそ匂へあはれわが、
思ひみだるやなにならむ、
こゝらの人のたのしげに、
歌ひつ舞ひつゆふかけて、
うかるゝ様を見るにつけ、
こゝろ騒ぐやなにならむ。
思ひぞいづる去年のはる、
日もくれがたの柴の戸に、
貴(あて)のわかうど訪ひまして、
かどに小草をつみゐたる、
わが父よびてねもころに、
「吾はみやこのものなるが、

「一夜のやどをたのまむ」と、
いへばえにしての給ひぬ。
「えならぬ花の香に醉ひて、
歸さわすれしかたならむ、
いぶせき賤がいほりをも、
厭ひまさずばやどりませ、
綾のふすまはあらねども、
こゝろ安さをまくらにて、
旅のみつかれやすめて」と、
うらなく父のうべなへば。
「あな有がたのみなさけや、

許せ」とばかりあでびとは、
おくの一間にいりましつ、
「むすめ」と父の呼ぶまゝに、
夕餉のかまどたきさして、
み前にいでゝうや〳〵と、
ためらひながら「よく社」と、
聲もはつかにぬかづけば。
「とみのぶしつけ咎めずて、
うらなくものを語れかし、
ひさごの底にのこれゝば、
はなの香にしむうま酒の、
今宵はともにへだてなく、

まどもる月のかげうけて、
酌みかはさなむいざ〳〵」と、
こゝろ輕げにのたまひぬ。

♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣

「うたげのむしろ小夜更て、
ちゝも貴人もすや〳〵と、
醉ひふしてこそ眠りけれ、
ゆめは何處をたどるらむ、
宵にたまひしさかつきの、
みきのなごりの露しづく、
君がなさけと手にうけて、
寢顏みまもるなづかしさ。

あかつきおきにあで人は、
ほゝゑみながら「ふく風を、
よそにして咲く此いほの、
花のいろかのゆかしや」と、
の給ひさしてたゞ〳〵と、
かどに見送るわらはをば、
かへりみがちにうち霞む、
ふもとぢさして出ましぬ。

また來む春もかならずと、
契りおかせしさくらはな、
人待ちがほににほへるを、
などてかおそき君ならむ、

よしや嵐は吹かずとも、
盛りすぎなばうばさくら、
あやなく色はさめぬべし、
香は知る人ぞ知るらめど。

若木の柿

ふきの花さくかどのべに、
腰をりかゞめうめきつゝ、
鍬もたゆげにやまがきの、
若木を植うるおきなあり。
をりしも小鰕めさぬかと、
笊をかづきていりたきる、
賤はおきなのさまを見て、

微笑みながら言ひけらく、
「あはれおきなよ君はしも、
八十ぢ斗りに見えつるが、
幸よく長らへたまふとも、
三とせ四年にすぎざらむ。
柿は八とせを過ぎざれば、
みのらじものを君はよも、
いつを頼みてしかばかり、
こゝろを籠て植ゑますぞ。」
おきな答へて言ひけらく、

「君は子もなきひとならむ、
怪しきことを言ひけるよ、
われには子あり孫もあり。」

池水

やなぎの絲をよすがにて、
はる風ぬるくふくなべに、
水際のこほりとけそめて、
笑むかさゝらく池のおも。

あはれいけ水なれもまた、
春のひかりにさそはれて、
まどふか波のたえまなく、
乱れよるなりしのび音に。

底のこゝろは知らねども、
戀のあぶらの身にしめば、
おもひにもえて胸の中も、
ほのほの海となりはてむ。

ほのほの海となりぬれば、
波はいよ〱あらたちて、
千ひろの底に待ちわぶる、
魔神のきばにかゝるべし。

或ひまどひていたづらに、
なげきの数を添へむより、
知らぬ昨日にたちかへり、

こゝろのどめよいけ水と。

きしべにたちて我言へば、
いらへも波のかず添ひて、
いや乱れつゝ空たかく、
松のあらしぞかすみける。

柴拾ひ

木をしげみ、
照る日もゝれぬ、やまかげに、
すゞかぜを、そでにはらませ、
まつのつゆ、たもとにうけて、
うたひかはせる、
わらべよあはれ。

あになるは、
ましらのごとく、木によぢて、
かれえだを、手折りておとし、
おとなるは、ひろひあつめて、
荷にそつくれる、
よろこばしげに。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

あさけれど、
たにまのしみづ、そこすみに、
にごりなく、よどまぬ見れば、
おとうとよ、われらが日ごろ、
おこたりやすき、
こゝろはづかし。

あはれよく、　あにきみよ、
言ひたまへりな、　かづきていなむ、
いさしばを、　たゞにやいこふ、
すゝしとて、
やみますはゝの、
やどに待てれば。
明日はまた、
あさ疾く起きて、　おとうとよ、
このしばを、　いち路はひさぎ、
はゝきみの、　くすりにかへむ、
なれとわれとは、
よし喰はすとも。

ゆふづく日、
みぬのあなたに、　かげ落ちて、
日ぐらしの、　鳴く音さびしき、
みやまぢを、　見ゐみ見ゐずみ、
しばかづきつゝ、
いぬは誰が子ぞ。
歸れ我きみ
うふすな神のみまつりも、
はや程ちかくなりにけり、
まつりの日には我きみの、
好みましけるよもぎもち、
あきます迄もまゐらせむ、

ことしの春のまつりには、
さとの若人うちそろひ、
わけの襦袢にたまだすき、
かけて神輿を舁くとかや、
いかに賑はふことならむ。

おたびどころの花もさき、
馬場のやなぎも靡きあひ、
みたらし川のみづの面も、
とき知り顔にさゝらぎて、
みな我きみを待ちげなり。
いかで今年はかへりませ、

としふる里のみまつりを、
兼てかならずかへりませ、
みやこの春になれしとて、
み業にいとまあらぬとて。

さとに帰らむそのをりは、
ひいなもとめて家土産に、
與へむとしものたまひて、
たちましゝよりはや十年、
戀ひつゝ待て過ぎにけり、
ひいなかざりて遊ぶべき、
春はむかしとなりぬれど、

むかしの春のこゝろをば、
忘れまさずばわがために、
わすれ給ひそいへつとを、
忘れたまはじきみはよも、
み親のとはにやすらかに、
眠りいませるふるさとを、
むぐら茂れるくさの戸に、
君まつわれのちぎりをも、

附録

此編は曩に都のにしきにて募りたる新体詩のこゝに匂ひいでたるなりけり

目次

恨星　小林杜月
高波　同
春の歌　同
ゆめ　内田萩江
四季　琴汀
萩の露　同
廣島にありし時大本營のあとをあふぎ見て　矢田部信男
客舍聞子規　同
亡き同胞を思ひて　千葉了辨
哀彼君　楯幽溪
夏風　高瀬政治
たが涙　高瀬水棹
姉と妹　廣幡慶人
故友の墓に詣で、　大河内蘇川

瑣々名美附錄

恨星

長野　小林杜月

まだうら若き春の夜の、
月のしづ枝ににほふ時、
花を透ふして新星を、
我は夢路に見てしより、
人なつかしき身となりぬ。

風もさはらぬ夏の夜の、
海原遠き波の上の、
かゝやきうめし夕づゝに、
我は夢路に逢ひてより、

人戀ひろむる身となりぬ。

逢瀬うれしき秋の夜の、
夕ぐれちかき山の端に、
今すみのぼる彦ぼしを、
我は夢路に知りてより、
嬉しき戀の身となりぬ。

あくるは遲き冬の夜の、
あけがた近き雲間より、
きらめき渡る曉星を、
我は夢路にとると見て、
墓なき戀の身となりぬ。

嗚呼うるはしき星影よ、
うれしき戀も汝が爲ぞ、
かなしき戀も汝が爲ぞ、
はかなき戀も汝が爲ぞ、

うれしき戀の今さらに、
かなしき戀に較ぶれば、
なか〳〵汝が姿こそ、
我はうらみと思ふなれ。

高波

うしほさみしき荒磯に、
今宵もわれは來りけり、
狂へる波のよるごとに、

戀しき君の音に出てゝ、
我名を呼はふ心地して。

戀しきまゝに家を出で、
夜毎に我は來つれども、
濱の松かぜ音のして、
やさしき君の姿をば、
見られぬ我の苦しさよ。

傀峭けづる磯鼻の、
いはほの上に我立ちて、
闊の海はら見わたせば、
岩根にくるふ高潮の、

音よりほかに聲もなし。

嗚呼よしさらば荒潮よ、
戀しき人のありといふ、
浪間に我をさらへかし、
はかなき現（うつゝ）にあらむより、
君と美妙の月を見む。

春の歌

うの花かをる里かはの、
岸の葉かげに幾夜經て、
なれをまちつる山吹の、
實のなきことを打忘れ、
思ふこゝろの一ふしは、

せめて哀れとくめよ春。

汝にまよひしうた人の、
化生の蝶のきのふ今日、
なれを忍ぶの花の香に、
ねむれる夢に通ひても、
墓なき戀をなぐさめよ。

おほろに霞む月かげの、
淋しき岸にわけくれを、
泣きつぶる音をきけや春、
我も迷へり汝がために。

今更かくと言はずとも、
汝はいつかは思ふらむ、
ふる春雨をきくごとに、
わが袖ぬるゝその度に。

おほつかなきの色に香に、
汝に尽せし甲斐もなく、
たてるや浦の八重霞、
のこして春の影もなし、

墓なき戀になかむより、
汝がかたみのふかみ草、
一枝手折りてゆく末の、

はかなき戀のうきふしを、
あけくれ詠め慰めむ、
汝がやさしきはらからの、
生ひさきてもる葉隱れに。

ゆめ　　　　　　内田　萩江

花を飾れるあやきぬに、
雪の肌へはかくせども、
こがね色なる靈光は、
あたり眩くきらめきて、
神々しくぞ見えにける。

頭をあげてきよらけく、
らうたき面わうかゞへば、

花のつぼみの唇の、
ひまよりもるゝすゞ聲は、
迦陵頻伽のふしに似て。

かたへの岩に寄立ちて、
片手にもたるすみれ草、
まさぐり乍ら笑み乍ら、
靜かに吾に見入りてぞ、
打いでにけるなつかしさ。

逝きにし人の戀しさも、
日を經るまゝに忘るてふ、
憂き世にませど君はよも、

吾をば忘れたまふまじ、
見ませやつれし此の面は。

怪しとばかり見まもれば、
深くもくぼむ片ゑくば、
にほへる眉はその儘に、
我が戀人の世にありし、
昔のさまに似たるかも。

思ひみる身の戀しさに、
こゝろの泉たぎりつゝ、
我にもあらで「君はたぞ
秀子がさまに似たる哉」

まことを聞かせ給ひてよ。

ときむらさきの菫ぐさ、
その花束をもちかへて、
「君ののたまふ秀子とは、
世にありし身の名なりしが、
いま涼しきみ國びと、

法のみそのに朝な夕な、
蓮のはなの香に醉ひて、
戀てふともおもほえず、
しらべ妙なる物の音に、
ひとり心をすませつゝ。

君もきませやむらさきの、
み雲にのりてとく來ませ、
とはにやすけき我もとに、
眞如の月をながめなむ、
をしむ名殘のある世かは、
こもる情のうれしさに、
秀子とばかり立わかり、
諸手をのべて寄添へば、
たちまち雲のなびき來て、
空にへだつや戀人を。
待てと呼はへどゆく雲は、

み空はるかにまひ上る。
折しもさやくくれ竹の、
葉分の月のちら〳〵と、
夢をあざける樣なるよ。

四季

琴汀

春

霞のころもまとひつゝ、
花のふゞきをふみ分て、
鳥を野山にきかましや。

夏

書よむ窓うつさみだれの、
霽るゝを待ちて行かましや、
いさゝ小川に螢かり。

秋

紅葉のにしきさかしつゝ、
月のかつらに掉さして、
虫のなく音をきかましや。

冬

昨日しぐれに暮れはてゝ、
今日しろたへの花ぞさく、
いざや雪見の酒くまむ。

萩の露

今年中秋三五の夕みさを女史芳齢二八を以て逝くるををしみて

彌生の花にあらしふき、
三五の月に雲かゝる、

げにや無情の世のさかや。
嵐に散りしその花は、
また來む春も美はしく、
梢に滿ちて咲きもせむ。
雲にかくれしその月も、
晴れし雲間に出てもせば、
影も桂にすみもせむ。
君が面わのその花は、
一度ちればいつかまた、
二度さかむ春やある、
月をゑがきしその眉も、
一度きゑて影失せば、
いつか冴けき秋やある。

いとしき君や今いずこ、
二八の花のかげうすく、
三五の月に雲かくれ。
操もきよきひめ小松、
萩の葉末の白つゆと、
雪をもまたで消えにけり。
今年三五のその月の、
雲にかくれしその時は、
君が門出のときなりき。
かなしき君が其かどで、
月もあはれと思ふらむ、
雲をへだてゝ送りけり。
無情の草木も君がため、

涙のつゆと浮へつゝ、
葉末のむしの聲かなし。
あはれ袖ふく秋のかぜ、
今は身にしむ山寺の、
鐘も無常をつげわたる。

廣島にありしとき
大本營のあとを
あふぎ見て　矢田部信男

虎ふす野べに茂りあふ
しこの醜草刈らむとて
我が大君はかしこくも
み旗をこゝに進めつゝ
肌へあわたつ冬の夜も

黒がねとかす夏の日も
我が大君のましまし丶
其跡ところかしてしや
とよあし原の國のため
臣の人々つどへつ丶
御軍すゝむろの道を
はかりたまひし其折に
用い玉ひしみつくゑは
あらき白木と見ゆるさへ
みゑもかざりもあらばてろ
つゝまやかなる御心に
黒木のまゝ宮居とは
誰がしるべき知りもせば

こゝろまめなる國人の
たれか袂のぬれさらむ
たゝかひ勝て國とみて
おごるは人の常なれば
たゞいたづらに打眠り
すぎし昔もわすれ草
朝な夕なに宮まもる
衞士に嚴しくとざゝれて
とふ人さへもたゑぬとし
聞くも中々かしこしや
をさまるみ代にありながら
亂れむ世をば忘るなと
いにしへ人のいましめの

言葉も今ぞしのばるゝ
これを思へばつかさ人
戸びら開きて國びとに
かしこき跡をとはせつゝ
深き眠りをさませかし
かしこき跡をしめしなば
深き眠りもさめぬべし

客舍聞子規

程は雲井に　へだてきて
故郷の月に　そむく身の
行けど歩めど　はてもなき
學のみちに　わけ入りて
早も三十ぢと　なりつるに

錦のころも　きもやらず
歸らむ日をば　まちわびて
忍び涙に　むせぶなり
家のはらから　父うへは
いかにか過し　たまふらむ
書よむ時も　いぬるまも
打も忘れず　今日もまた
すぎこし方の　しのばれて
ちゞに心を　くだきつゝ
夢結ぶまも　あらばこそ
むせぶ涙に　たえ入れば
ともし火いつか　消えうせて
かたぶく月の　かげさえぬ

血になく鳥　のこゝろなく
不如歸と呼ぶぞ　うらみなる」

亡き同胞を思ひて

播磨　千葉了辨

知らぬ知られぬ前つ世に、
不祥の爲にしありてかも、
わがはらからはあへなくも、
先たちけり死出の旅。
今日の手向の一枝も、
なきはらからが植置し、
花と思へばむらしぐれ、
胸のくも間ゆろゝぐ也。
時雨の露のひとしずく、

手向の花に宿りつゝ、
かすけき風にゆらげるや、
亡きはらからの魂ならむ。

哀彼君

播磨　楯幽溪

まなこは宵の星に似て
頬はさながらあけの雲
やさしき聲を聞きてしも
昔の事となりにけり
君が宿がりきて見れば
門への柳かきつへの
卯花のみは今もなほ
變りこそせねうつゝにも、
夢にも戀ひし其かけの、

見えぬはいかにいぶかしや。
聞けば哀れやかの君は、
やむなき事にすかされて、
あたら其身をにごり江に、
沈めしとかやほゐなくも。
さりとていかで其事を、
知らさゞりけむ彼君は、
外にたよりもありけむを、
よしなき者と我をしも、
思ひなしてかさては又、
世にはづかしと思ひてか。
哀れ千すぢのなみだとも、
つらき思はあふれけむ、

されど苦しきその思ひ、
世にくむ人のなくてやは。

夏風　熊本　高瀬政治

夕かほたなの下すゞみ、
月すむかどの何はあれど、
晝せすゞしく吹けや風、
いもが草とる、田のくろに。

たが涙　熊本　高瀬水掉

やよ祖父様よ母さまは
なぜいまさゞる父様は
いつかへります軍より
我は泣かすにある者を
祖父は涙にくもりて

哀いとしき汝がはゝは
なれか二の折なりき
世になき人となりにしぞ
軍にたちし汝が父は
待つかひもなく今は世に
歸らぬ冥の旅人ぞと
忍ひもあへず泣きなけば
うなゐは頭うちふりて
いやよ祖父様何いふぞ
軍はてなは父さまは
母樣つれて歸りくと
聞きたる者を父樣よ
母樣つれて疾くかへれ
かへれとばかり呼へるに
涙を笑にまぎらする
祖父のこゝやいかならむ
夏さり秋もきたりつゝ
峯のあらしに雁の聲
たゆず音なふ一つ家に
うなゐの待てる其人は
影だも見えで朝夕に
同じ事のみ呼ふなる
うなゐの聲のかなしさに
袂しぼるやたがなみだ」

妹と姉

京都　廣幡　慶人

知らぬ山路に迷ひ來て
松の木蔭にやすらへば
まだうら若き少女子の
はらから二人たど／＼と
苔路つだひに辿りゆく
身には纏へり古ころも
足にははけり荒わらじ
小さき背にうづたかく
妻木かへるもいとほしや
あたら色こきくろ髪は
蜘蛛の巣こもる如くにて
み山あらしに任せつゝ
力なげにも見ゆるなり

折しもすさぶ花ふゞき
共にこゝろも亂れけむ
新月の眉ひろめつゝ
これ姉君よ聞きてたべ
我友みなはあやにしき
身にまとひつゝ打つれて
昨日も今日も野に山に
若菜もつみつ花もみつ
心のまゝあそべるを
我らが上のうとましや
月も櫻もよそにして
かゝる賤しき業にのみ
其日／＼をくらしゆく

身の行末やいかならむ
のう姉君とうながせば
姉はさひしく打ゑみて
花の面わをそむけつゝ
かこちて世をば何かせむ
恨みて人を何かせむ
よしやつゞれは纏ふとも
誠ぞ人のいのちなる
金殿玉樓綾錦
見る目まばゆく飾るとも
心の外になにかある
誠のこゝろ人もたば
祈らずとてもと言へりける

言葉をしめて親の爲
われ諸共につとめてよ
つとめて後に幸ありと
さとすや姉の言の葉に
うなじを上げていもうとは
ゆるしてたまへとばかりに
包む涙をはらひつゝ
はらから二人しを〳〵と
麓べさして急ぎけり
あわれいとしき少女子や
あはれ床しきま心や
世の人皆のうかれあふ
月雪花をよそにみて

こゝろひとつに親の爲
身のいたつきも返りみぬ
胸のかゞみぞうるはしき」

故友の墓に詣でゝ

大河内蘇川

軒にしたゝるあを柳の
ふたゝび萌えて鶯も
來鳴くを見れば去年今年
年は變れどあづさ弓
春にかはりはなき者を
去年の此頃いろしみて
其下かげにま心を
書よむ道に尽したる
君はいづこぞ今いづこ
我みやこべに上るとて
君が宿かり音なひて
別れし時のおもかげは
今もうつゝに見るものを
深き恨みをふくみずゝ
草葉の蔭にいますかと
思へば墓なき浮世哉
思へばつれなきいのち哉
哀時期しもあらむには
いと勇ましくいで立て
眠れる今の世の人の
深き夢路をさまさむと

誓ひなし丶を今いづて
人のいのちは朝顔の
露よりもろし朝顔は
晝にしぼみて其つゆは
あしたの風に消ゆれども
人には時のさだめなし
思へば墓なき浮世かな
思へばつれなき命かな
さはいへおのか思根の
半もなして失せむには
深き恨みはなからむも
時期に逢はざる君はしも
地下の恨やいかならむ

思ひいづれは中々は
淺間のみねのあさましく
もゆる思のたへかたみ
君がおくつき音なへば
千草が中にうづもれて
塔婆は雨にさらされつ
花はあたりに匂へども
とむらふ人もなかり梟
霞は八重にこもれども
見る人もなし常盤木の
繁みがくれに白鳥の
友よびかはす聲ばかり
あなうたてしや昨日まで

ゆかしく見え紅し顔の
その美少年今はこの
地下にありとし忍ふれば
萬感そゞろ胸をうち
言はむとすれど言ひもえず
汲みとり給へわがおもひ
心ばかりを手むけたる
此花しきみあかの水
受け給へかし受け給へ
よしや此花かれぬとも
よしや此水つきぬとも
伊香保の沼のいかてかは
つきはてぬべき我恨み

枯れはてぬべき我思ひ
あなうたてしやうたてしや
入相告ぐる鐘の音も
塒求むる鳥の音も
身を刻まるゝ心地して

明治卅一年六月十五日印刷
全　年六月廿五日發行

定價金二十錢

編纂者　育英社
右代表者　金子專太郎
京都市上京區寺町通リ二條下ル妙滿寺前町十三番戸
發行者　河合卯之助
京都市上京區御幸町通二條上ル達磨町二十四番戸
印刷所　村田三男三
京都市寺町二條下ル
發賣所　文港堂書店
東京神田表神保町
發賣所　東京堂書店
東京神田雉子町
發賣所　岡崎屋支店

版權所有

三十一年五月大改正

中等教育 書籍廉價目錄
附新刊圖書及雜誌

郵券二錢送附ノ方ハ無代進呈ス

弊堂從來學生諸彦ノ御便益ヲ圖リ學校教科書ハ特ニ其價格ヲ低廉ニシテ以テ其御需用ニ應スヲヲ主トセリ故ヲ以テ發賣數日ニ月ニ增加ノ榮ヲ來セリ是レ偏ニ大方諸彦カ御愛顧ノ然ラシムル所ニシテ實ニ欣抃啻ナラス候因テ今回其御愛顧ニ酬ヒンガ爲メ一層御便益ヲ擴メ中等教育ニ係ル書籍目錄ヲ編製セリ而シテ其記載セル書籍價格ノ如キハ極メテ低廉ヲ主トシタレバ他書店ノ價格トハ霄壤ノ差アルベシ殊ニ書目ヲ分類列擧シタルヲ以テ搜索一過猶ホ物ヲ囊ニ探ルカ如シ大方ノ諸彦萬望本目錄ニ依テ倍舊ノ御注文ヲ乞

京都寺町通二條下ル

河合文港堂書店